

石造文化への思い

明礬（賛助会員）

加藤 義 則

私は、かねてより「石こそ人類文化の発祥である」と考えてきました。

朝日校区とその周辺を見回しても、到る処に石造文化（財）の数々、たとえば各地区には記念碑・功德碑の類、石塔・石仏・石庭・灯籠などから古墳の発掘石造物、さらに神社・仏閣の境内に見られる数多くの石工作物、田舎の道路の辻に見られる石祠（地藏さまなど）などがあります。

私が住む明礬地区周辺から、順次見てゆくことにしよう。

(1) 天間地区

ここには、別府市域で唯一つとされている戦前の「慰霊碑」がある。戦前まで、これらの記念石碑は「忠魂碑」

とも呼ばれて、明治維新（一八六八年）以降、国家のために殉職された人たち（主に戦没者）を祀っており、毎年春秋の二回招魂祭が開かれていました。

朝日校区には戦前、小高い丘陵地（現大観山町）貴船城の下当たりに建てられていた。戦後、GHQの指令で、これらは軍国主義の象徴物として撤去が命ぜられた。

(2) 湯山地区において

戦後、暫くの間、湯山養鱒場として名所であった一角には、鎮西八郎為朝（源為朝一一三九〜七〇年）が九州で権勢を誇っていた頃、当地に立ち寄り鎧を置いたと伝えられる「鎧石」がある。為朝は名だたる豪勇と射術に長じていたことで有名でした。

海門寺入口（旧北小学校グラウンド西）には松の木数本があり、四極山（現高崎山）の的を射て弓を掛けたという（弓かけの松）伝説も残っている。

また、村内の湯山殿には貞観九（八六七）年、鶴見岳大噴火の折、その前兆ではなかったかという、いわゆる「踊り石」。冬ヶ城北端には「獅子岩」と名付けられた巨岩も存在している。

(3) 明礬地区（徳川期、明礬製造をしていて地名

になった)

当地の南方高台(字敵原)には、今日なおグラウンドと呼んでいる広場があり、ここには「建設記念碑」が立っている。その昔、明治三十四(一九〇一)年地元有志らが灌漑用の池を企画し、周囲一帯に桜と松の木を植えて公園にしよとした、と聞いている。春は花見、秋・冬は山行事や山祭の集会所にも利用したようだ。

昭和八年と九年には、地区挙げて校区の朝日尋常高等小学校の全児童・生徒を招待し、春の大運動会を開催したという実績をもつ。

なお、当地区には、石造の弁財天(音楽・枝芸の守護神、インド・ガンジス河の女神)、山の神である山祇神、それに航海安全を祈る金比羅神の三神を祀る「石祠」もある。山の神を祀る理由は判るが、海にかかわる二神の経緯は不詳。かつて古老から聴いた話では、五千年前(一万年)の大昔、別府湾が深く入り込み、大平山麓まで海岸であった、とか。それが証拠には、内山溪谷入口には往古からエビス神社が、小倉と竹の内両地区の字境には「鯛釣り石」(後述)が残っていることから、何か関係がありそうな気がする。なお、徳川期(享保年間)

に明礬製造で功勞した功勞者、渡辺五郎右衛門の墓が鶴見町(四一一番地)にある。墓石は総高一・三八メートル、無縫塔(卵塔)で花崗岩で造られている。

(4) 扇山と小倉地区周辺

歴史的に鶴見の里は、古代(律令国家の郷里制)には敵見(のちに朝見)郷に所属し、中世から近世に入り戦国時代後、豊後森藩の久留島侯(石高は当初一万四千石、のち一万二千五百石)の飛び地となった。

小倉地区の照湯温泉周辺は、鶴見原中村庄屋(直江雄八郎)著『鶴見七湯記』の中の一つで典型的な温泉場。別名、「殿様湯」「御前湯」とも呼ばれていた。湯治諸施設(浴槽・滝湯、石庭、築山など)には祓川(春木川の上流)河川敷の「自然石」がふんだんに使用されていたらしい。

また、この小倉集落と竹の内集落の字境には、古来地区住民が「鯛釣り石」と呼んできた巨石が横たわっていた。ところが昭和三十年代、山なみ道路(九州横断)建設で道路敷に当たることから、扇山町を含む四町自治会で保存運動がおこり、県土木事務所でも要望を容れて数十メートル東に移動し、自衛隊別府駐屯地東方道路沿い

に小公園を設け、ここに永久保存することになった（詳細は本誌第十五号参照）。

さらに扇山の山頂には、昭和二年十月十二日登山を楽しまれた久邇宮邦彦殿下の「登山記念碑」が建つ。また山腹七合目南端には「硯石」と呼ばれる奇石があり、年中雨水を絶やさなことから名付けられた、という。扇山の先述内山溪谷の入口近くには、植樹記念の「石碑」（功德碑）が建つが、これは竹の内居住の大野勲氏祖父（当時、朝日村会議員）が無償奉仕した記念碑である。

この山林中には終戦まで、鶴見の農家が家畜（牛馬）の飼料とする、夏草刈りで鎌を研いだという「砥石岩」も現に残っている。

(5) 鶴見原（鶴見町）と石垣原（荘園町） 一帯

石垣原合戦があつたのは、慶長五（一六〇〇）年秋月（陰暦）のことである。

鶴見村内の角（殿）山・実相寺山の東西線と南方境川筋に囲まれた一区画は、当時は人家もまばらで、大方は原野と松林であり、石垣扇状丘陵地の中央部分を占める。

この地域一帯は、鶴見岳大爆発のとき大小無数の石群が飛散したため、石垣（村）の地名が名付けられた。ちな

みに「石」の付く小字名を挙げれば、次のようなものが別府市の（村字図）に見える。

尖石 ヒゲ石 大石原 夫婦石 館石 鹿爪石
石田 その他

戦場としては一中津黒田軍と木付（現杵築）軍は両山の南斜面に陣取つたのに対し、大友本陣は現観海寺高台（南立石本村）に置かれた。主戦場は石垣原の方で、現国立西別府病院（敷地）から旧九大温研周辺であった。

ここには「七つ石」跡と、先掲の「館石」跡が現に遺され公園化されている。また、大友軍の勇将、吉弘嘉兵衛が討死したと伝える場所にも「巨石」が残され、隣地に地域住民の稲荷社が祀られている。

周知のように名将吉弘公を顕彰し供養する吉弘神社（石垣西町六丁目）には、墓所と慰霊碑の数々が、その一隅には「丈くらべの石」（高さ約二メートルの石柱）があつて、大人・小人を問わず背の丈を競っていたといわれる（昭和八年刊『別府市誌』）。

また、角（殿）山と実相寺山との中間には切り通し（地名は犬の馬場という）があり、その道路傍には合戦時の戦死者を弔う石祠（数個）の霊が眠っている。西方、

角山南の原集落（現鶴見町）には旧家の久士目本家（家祖は旧中津の小笠原藩士、久士目六郎左衛門尉義光）があるが、明治初期地区の発展を願って数個の巨石と小森の地所一角を寄附した。

鶴見の原中村に居を構える当たり、家神としていた稲荷神も併せ持ち帰ったが、現在の稲荷神社がそれである。隣地の公民館の北裏には「隧道記念」の石碑がひそかに立っている。

(6) 鉄輪（北鉄輪）・野田地区周辺

往古の鉄輪温泉は、想像するに到る処に地獄のふく噴気・沸騰泉、それに自然湧出の熱湯が溢れ、噴き出す熱気で死傷したり、河川への流入で魚類が死滅したり、稲田もまた不作であったと考えられる。こうした事から、せっかくの温泉も、往古は地域住民に恐れられ厄介もの扱いされていたようだ。呼び方も、八丁四面の「地獄谷」とか、「地獄原」とか言われていた。

鉄輪温泉の開基はここに説くまでもなく、四国伊予出身の一遍智真人（時宗の開祖、諱名は聖誠大師一二三九〇八九）である。

地域住民の苦難を嘆いた上人は、まず怒り狂う地獄神

の霊を慰めようと大蔵經教典の一字々々を小石一つずつに墨書し、祈祷の続経を誦しながら投げ込んだところ、神の怒りも和らぎ仏の慈悲で収まったと伝書に記している。自来、上人は温泉の効能を説き利用の環境整備に努め、温泉場開発の基礎を固めたのであった。この意味で鉄輪温泉の開発と発展も、小石の「二石」々々から始まった、と言ってもよいのではあるまいか。

こうした歴史的縁から、鉄輪周辺には由緒ある石造物が決して少なくない。

西方山手の地獄地帯には、白池地獄内に戦後いち早く注目を集めた「（白池）国東塔」や「向原石幢」、神和苑内には「永正板碑」や「永享石礎」（以上、いずれも県重要文化財指定）が存在する。最近、地元新聞（大分合同）にも紹介された街おこし団体（「愛耐会」主催）の「湯けむり俳句」募集入選句の句碑が温泉場の要所に九基も建てられている（うち一基は明礬温泉）。もちろん海地獄園内にもあり、観光客・湯治客の俳句関係者の目を楽ませている。

鉄輪下の地獄原共同温泉前には、速見郡南鉄輪村の与組（組頭）で明治維新後、保長・副戸長・戸長（村長）

を勤めた加藤新六（一八一五〜九〇）の「功德碑」が、さらに旧平田・鉄輪・石垣（中須賀）三村の境界、大石地区に道路開通への遺徳を追慕する「記念碑」も建つ（大正六年三月建立）。鉄輪といえは何といっても「蒸し風呂」、これは説明を加える必要もなからう。また最近国の重要文化財登録の旅館・富士屋本館の石庭風の庭園（家屋とも）も挙げねばなるまい。

かつての北鉄輪（明治八年南鉄輪村と合併して鉄輪村に）には「時計石」と称された珍奇な石があったというが現存しない。野田地区では大温寺の塚ヶ城趾の「五輪の塔」など、などが見られる。

鉄輪には含まれないが、八川を挟んだ旧中組（火売町）と北中町には、家畜牛馬の霊を供養し安全を祈願する石祠「大將軍」^{だいしょうぐん}がそれぞれある他、年の神を祀る石祠が火売では火男火売神社境内に、北中では稲荷社前に置かれている。さらに火売町には「古殿板碑」（昭和五十五年市有形文化財指定）が存在する。

(7) その他、市内には

亀川温泉周辺では、史跡鬼の岩屋（上人西町所在）の一号・二号古墳（玄室・大石畳）の他、亀川国立病院北

裏には、ここにも「鯛釣り石」があり、この辺まで海岸であったと古老はいう。野口原（三〇一八番地）には「五輪塔群」、中島町（二〇番地）には「宝塔二基」、カマドには「カマド氏墓地五輪塔」と「古塔群」がある。

さらに、市美術館内（上人町）には輝石安山岩で造られた「文永笠塔姿」^{かさとうば}（昭和四十七年県有形文化財）と「正安五輪塔」（同上）など。南石垣には珍しい「寛永キリシタン塔」（昭和四十二年市指定）も。乙原には、かつての大友氏の菩提寺であった「吉祥寺開山塔」、それに乙原の滝近くに「夫婦石」。なお、鶴見岳・立石山・姫山などには巨石遺物があり、鶴見山元宮上には畳八帖敷もあるという「踊り石」も付記しておこう。

まだ石を使った石造文化工作物が数多く存在していることだろう。祖先や先代の遺された文化を掘り起こし、後世に伝え語り継ぐことの重要性を噛みしめながら筆を擱くことにする。今回は昭和六十年刊の『別府市誌』を参考にしましたが、筆者の不勉強から間違いがあれば何卒お許し下さい。

（おわり）